〔雅遊漫錄二〕書燈

臘仙神隱曰、書燈以薄木板作之、如木櫃狀、黑漆文之、寬六七寸、只可一小燈盞、高八寸、項有圓竅徑三寸、前有吊窓、挂起則燈光直射於書上、其明倍於常燈、香油一斤入桐油三兩、耐點、又辟鼠耗、以鹽置盞中、亦可省油、以生薑擦盞邊、不生暈、

此製既に此土古よりあり、板を以て上狹下廣く造り、三方圓竅あり、前にひらき戸有、上に煙ぬきの竅あり世に玄るごとし、有明行燈と云もの是なり、余（大枝流芳）新に良法を出す、行燈大小方圓をえらばず、燈火の前遮燈板をまふく、其制横六寸計、竪四寸計の薄板を造、上の左右に一尺二三寸の絲を付て、絲の終りに一錢半計の鎭を付、絲をあんどうの上の横木に打かけ、提昂意に任てよきかげんに燈火をさへぎり、じきに火を不見、下より光をとりて書面を照す、一には目を養、じきに火を見ざれば也、二には風にあたらず、火不動して油も耗ず、三には油煙眼に至らず、四には光外に泄ず、直に書を照せば、光明外の法よりも勝る、此四德有、爰に圖してさとらしむ、（略圖）また一名繼晷板と云、これ韓退之燒膏油繼晷といふ句によれり、

〔芙蓉文集下〕掛燈蓋　耳得

日月のともし火、江海は油、是を天地の燈蓋といふ、このもの人家にくだりて、かけ燈蓋とは誰名付けん、なかんづく都三條大路に用られて、螢とびかふ夕暮や、蟬の小川に聲ありて、水無月の涼風、軒をめぐれば、消なんとしてはかゝげ、其榮枯風にまかす、あるはむら雨の晴間待間、かれにふたするの自在あり、あるは蒲やき田樂に光をそへ、爐にあたる横顏に、鈎髭のますら男をつなぎ、又華街青樓のかけ行燈は、夜の錦に輝て、羅綾の袂とこそ見ゆれ、將浮圖の莊嚴第一には、高座に如幻のをしへあり、あなかなし人の世中燈のごとし、かならず消る事忘るべからずと、ある僧の垂戒も尊し、詩にかたみをのがれ、歌にぬめりをはづれたらば、我俳諧の道に似たるものは、此掛